

<報告>第9 回ラグビーワールドカップの日本開催を終えて

著者	嶋崎 達也
雑誌名	大学体育研究
巻	42
ページ	65-67
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159931

第9回ラグビーワールドカップの日本開催を終えて

嶋崎達也¹⁾

After the 9th Rugby World Cup in Japan

Tatsuya SHIMASAKI¹⁾

1. はじめに

2019年の秋、日本で第9回のラグビーワールドカップ（以後W杯とする）が開催された。1987年から始まったラグビーW杯は、これまで英国やフランス、南半球の限られた強豪国で開催され、アジアでは初めての開催となった。それはラグビーが歴史的にアマチュアリズムを重視してきたこと、そしてその競技特性から世界的な広がりを見せていなかったことが要因だと考えられている。そのため、今大会は日本やアジアにおけるラグビーの発展のために重要視されており、日本のラグビー関係者の多くは大

会の成功への期待と不安の中でのW杯開催となったのではないだろうか。

そのような中、注目されるのは2大会連続のW杯優勝を誇るラグビー王国のニュージーランド、そしてエディージョーンズ率いるラグビーの母国イングランド、また近年ニュージーランドを二度破り世界ランキング1位のアイルランドなどの国々であった。そして、前大会で史上最大の番狂わせと言われる南アフリカ戦の勝利を経て、3勝を挙げた日本代表の活躍は今大会の成功の要件だとされる中で、この大会は幕をあげた。

2. 勝負の行方

今大会での最も注目の試合と言えるのは、準決勝のエディージョーンズ率いるイングランドと優勝候補のニュージーランドの対戦なのではないだろうか。結果は、イングランドがニュージーランドを内容的にも完全に抑え込み勝利を収めた。過去に何度かエディージョーンズのラグビークリニックやセミナーに参加したが、毎回のように冒頭に「なぜ、皆がニュージーランドの真似をするのか?」「あなたのチームにニュージーランドのシステムで機能する選手がいますか?」「同じことはしては勝てない」と



写真1 開幕戦の日本対ロシア戦

1) 筑波大学

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba



写真2 会場の雰囲気

いう話がされていた。世界で最も強く、魅力的なラグビーをするニュージーランドを盲目的に模倣する指導者に対して、警鐘を鳴らすような質問をされていたのが印象深かった。ニュージーランドに勝つためには、彼らを模倣するのではなく、イングランドの選手や風土にあった強みを最大化させて、考えるべきだといつも述べていた。結果として、4年間ニュージーランドに勝利を準備してきたイングランドがニュージーランドに勝利し、そのニュージーランドに予選リーグで完敗した南アフリカが、決勝でイングランドを抑え勝利した。南アフリカは決して華やかなラグビーをするわけではなかったが、スクラムやラインアウト、タックルというラグビーの根源的な部分の強みを最大限発揮して、同じような強みを持つイングランドを圧倒した。もし、ニュージーランドが決勝で南アフリカと対戦したら、どうなただろうか。今大会、ニュージーランドを破ることができたのは、4年間ニュージーランドにどう勝つかを準備してきたイングランドだけだったのではないだろうか。指導者として、選手の能力を最大化させること、自チームを知って強みにこだわること、ピーキングなど多くのことをこの対戦から学ぶことができる。

3. 日本代表の強化

そして、なんといっても今大会を盛り上げた

のは日本代表の躍進である。2015年W杯後、日本協会としては元日本代表でニュージーランド人のジェイミージョセフを招聘した。また南半球のプロリーグであるスーパーラグビーにサンウルブズというチームを組織し、参戦することによって、日本国内で体験できないトップレベルの試合経験を様々な選手に与えた。また、帰化しなくてもその国の代表になれる独特のラグビーの慣習から、社会人のリーグで代表資格を取得できる可能性のある選手の外国人枠を広げ、大学ラグビーでも外国人枠が2名だったのが、3名にも変更した。これにより、日本代表候補の海外にルーツを持つ選手層が大幅に増え、また国内のリーグもレベルが上がったと言える。日本人選手の育成という課題は残るが、今回の日本代表では、海外でルーツがある選手は16名、2015年大会が11人であったので、強化策は一定の成果を上げることができた。

また、日本代表にジェイミージョセフが持ち込んだラグビースタイルは、ニュージーランドで自身が率いて成功したものをベースにしたと言われている。エディージョーンズ時代のものとは違うもので、ある時期には機能しないこともあり、「日本人に合っているのか」など賛否両論あった。しかし、結果的にはそのスタイルをベースに、試行錯誤し、進化させ、結果を手にした。2015年大会とは違ったラグビースタイルで、前大会以上の結果を残せたのも興味深いものだった。

4. 日本代表の成長

また、この躍進の背景にはやはり、前大会の経験が大きかったのではないだろうか。2011年のW杯後、日本代表メンバーや日本のラグビー関係者の多くが、世界では勝つのは難しいと考えていた。しかし、2015年大会で世界的名将のエディージョーンズに率いられて、経験した結果とマインドセットを変えられたことで、選手、そしてラグビー関係者も世界で勝つことはできるというマインドが変わった。また、

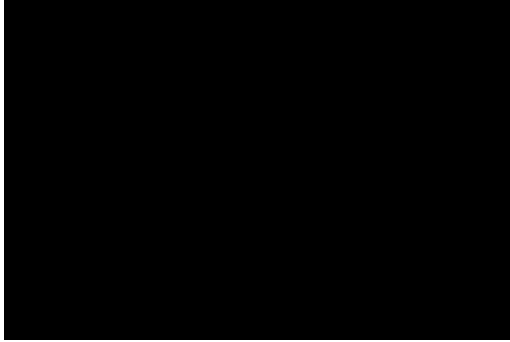


写真3 筑波大学時代の福岡堅樹

2015年の強制的なハードな練習で成功体験を得た日本代表が、2019年大会では主体的にハードな練習をしていったプロセスがあるように窺える。エディージョーンズも様々なマネジメントをトップダウンから、リーダーに任せる形へ移行していたと聞いていましたが、今回はさらにジェイミージョセフはリーダーとともに対話しながら、チームを作ってきたという記事を何度も目にした。キャプテンのリーチマイケルや筑波大学の卒業生の福岡堅樹を含め、前大会を経験した9名のメンバー達が中心となり、自律的なリーダーシップが発揮されたのではないかと推察される。

5. ラグビーの価値観

そして、ラグビーに携わる者として最も嬉しいことは、今大会を通じてラグビーの持つ価値観が多くの人々の目に触れたことである。武道における礼節を大事にする伝統的価値観に深く触れている日本人にとって、骨身を削る戦いの後、ノーサイド精神や対戦相手やレフリーを尊重するという言動は、深く共鳴する部分があったのではないのでしょうか。実際に大会中は、ラフブ

レーをした選手が試合後に対戦相手のロッカーに謝りに行き、それを迎え入れてビールを渡す場面や、負けたニュージーランドの失意の中で振る舞い、など相手を尊重するシーンが多々あった。また選手だけでなく観客にとってもそれは同じであった。最員のチームと観戦場所を分けないラグビーは、隣に対戦相手のチームジャージを着た観客がいることが日常である。そこでお互いの国歌を歌い、相手チームの良いプレーには賞賛を送る光景は、実際にW杯を観戦し、改めて素晴らしい事だと感じられた。その他にもW杯期間中に様々な話があり、ここでは書ききれない。ラグビーがアマチュアリズムを長い間守り、大事にしてきた伝統的な価値観が、多くの日本人の目に触れ、心を動かしてくれたことを誇りに思えた。そして、改めてラグビーの価値観を大事にし、伝えていきたいと1人のラグビーに携わる者として思わせてくれたW杯であった。

6. 最後に

今回のW杯は結果的に99.3%という過去最高のチケット販売率を記録し、2019年の最高視聴率をラグビー中継が獲得し、大きな成功を取ることができた。その後の日本代表メンバーの活躍や試合の観客数の増加を見ると、これまででは信じられないような状況にある。現在、日本国内ではリーグのプロ化の話が出てくるなど、ラグビーを取り巻く状況が今後大きな変化を迎えるかもしれません。今回のW杯が日本とアジアのラグビーの競技的発展、また伝統的価値観の継承に繋がることを望みつつ、微力ながらもそこに寄与していきたい。